

『普勸坐禅儀』ノート（その三）

神 戸 信 寅

第三章 正しい坐禅の勧め

誰でも坐禅

『普勸坐禅儀』における、この章は正しい坐禅を普く勧

第十段（本文）

（訓読）

めることによつて、『普勸坐禅儀』の結文としている。それ故、そこには、道元禅師の一般の人々のため、という

然則、

然れば則ち、

「普勸」の心持が提示されている。

不_レ論_二上智下愚_一、莫_レ簡_二上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ぶこと莫れ。

禅師は、この「正しい坐禅の勧め」の章において、特

専一功夫、正是辦

専一に功夫せば、正に是れ

に、この坐禅が、誰でも、何処でも、即時にすべきもので

道。

辦道なり。

あることを示されている。そして、それを修行護持していくための用心として、最後において説かれて、結ばれてい

修証自不_二染汚_一、趣向

修証自ら染汚せず、趣向更に是れ平常なる者なり。

るといえる。そこで、この「普勸」の心持を汲み取るた

（字解）

め、誰でも坐禅・何処でも坐禅・直下の坐禅・そして坐禅生活の用心、と区分して見てみたいと思う。

△然則。則は「貝（財貨）」と「刀」から、物貨を等分すること。等分の義より人の従うべき原因結果の法則等の意

で、接続詞としては、然る時は、その時はの意。《然則》は上を翻して下を起す語として、俗に「れば則」という。『正法眼蔵』「辨道話」をはじめ、多くの巻に「しかあればすなわち……」という語句を見出す。「則」を「即」とすれば、今の意にて「直に」「すぐさま」の意となる。△不論上智下愚。論は心の思うところを述べる「言」と音符の「論」から、自家の意見・主旨・所説等の意。智は古文にては「矯」と書く。「巧」は言語、「白」は明白、「知」はしることから、物事を明に知る意。仏法で智(Jiāna)は主に悟りの智慧に用いられる。ものごとを理解し、是非・善悪を弁別判断する心の作用といったものを「識」とすれば、「智」は「道本乃至全体」といった仏祖の世界を明め行ずる仏智であるが、ここでの「智」は「識」の意。《上智》は知能のすぐれていること。聡明なこと。愚は「禺」と「心」の会意形声で、「禺」は猴の一種で、おろかなる獣ということから「心」と合せて才智の乏しくおろかなること。愚鈍なこと。『開解』に「論語陽貨篇云、唯上知與下愚不_レ移。」とあり、「大論(大智度論)八十三云、世尊是門、利根菩薩摩訶薩能入。佛言、鈍根菩薩亦可入。是門、是門無礙、若菩薩摩訶薩、一心學者、皆入是門。」

とある。

△莫_レ簡_二利人鈍者_一。簡は文字を記するに用いる竹牒、転じて書物の義、「間」は音符。また、えらぶ義より、善悪を分別して、すぐれている方を取る意、簡取のこと。利は「刀」と「和」の合字で、刀の鋭きこと、賢きこと。《利人》は利根の人。鈍は「金」と「屯」の形声で、鋒鈍のにぶいこと、知能のにぶいこと。《鈍者》は鈍根の者。『学道用心集』「参禅可_レ知事」には「伝_二得佛道_一之法在_二聡明博解之外_一」、「参学可_レ識、佛道在_二思量・分別・卜度・観想・知覚・慧解之外_一也」、「学道者不_レ可_レ用_二思量分別等之事_一。」として坐禅のあり方を示している。△專一功夫。專は、もっぱら・ほしいますま等の意にて、《專一》はある一事のみに打ちこんで専らなること。「専力」といえば、力を一事にいたすこと。『正法眼蔵』「重雲堂式」に「寸陰すつることなかれ專一に功夫すべし。」とある。「專一功夫」は寸陰もおしんで一事に力を専らにして、それと一になること。△正是辨道。是は「日」と「正」の会意で、正しく直きこと。ここでは「此」に通じ、これ・この意。此は彼に對すが、是は非に對す。此書といえは彼の書に對するが、是

書といえは当書のことですぐ、その書をさす。《正是》は、まさにこのことがの意。『聞解』に「邪をみぬなり」とある。また、「功夫」を修とし、「辨道」を証として、修行が「正是」証悟としている。《辨道》は成辨仏道の意。『正法眼蔵』「辨道話」には「いまをしふる功夫辨道は、証上に万法をあらしめ、出路に一如を行ずるなり。」とあり、「見佛」には「而今脚尖に行履する、発心発足よりこのかた、辨道功夫、および証契究徹、みな見仏裏に走入する、活眼睛なり、活骨髓なり。」というように「功夫辨道」「辨道功夫」として述べている。

△修証自不染汚。染は「シ(水)」と「木」と「九」の合字、水は液、木は木汁、九はその度数を示すことから、液に浸して絵をそめること。汚は濁った溜水のことから、人の行の濁って清からぬこと。《染汚》は染めけがす意で、『佛教語大辞典』(中村元著)には、呉音では「ぜんお」とよむが、天台宗などでは「ぜんま」とよむ、禅宗では「ぜんな」とよむ、とある。《修証自不染汚》は『聞解』によれば「修証両段ナラヌユヘニ、修ニ修ノ染モ見ヘズ、証ニ証ノ汚モツカヌナリ、」とある。一般に「不染汚の修証」として『景德伝灯録』卷五南獄章における六祖慧能と

『普勸坐禅儀』ノート(その三) (神戸)

南獄の因縁「六祖、祖(南獄)に問う、什麼の処より来る。曰く、嵩山より来る。祖曰く、什麼物恁麼来。曰く、説いて一物に似たるも即ち不中。祖曰く、還って修証すべきや否や。曰く、修証は即ち無きにあらず、汚染(染汚)は即ち得ず。祖曰く、只此の不染汚(不染汚)は諸佛の護念する所なり。汝も既に是の如し、吾も亦是の如し。」による。この不染汚の修証は『永平広録』卷五、『正法眼蔵』「洗淨」・「身心学道」等に、その参問得法の事跡は「徧参」の巻に詳述されている。

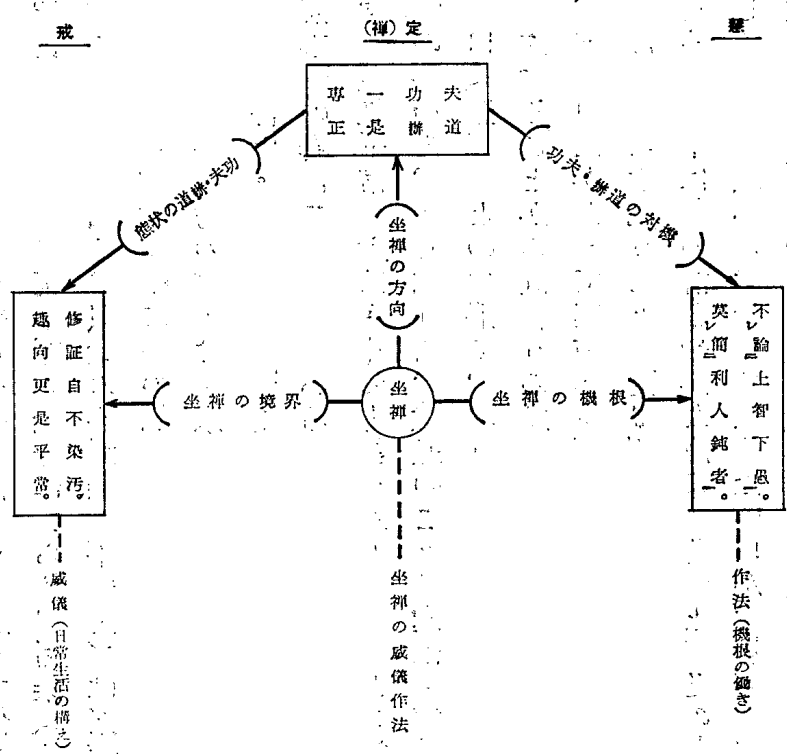
△趣向更是平常。趣は疾くおもむく意の「走」と音符の「取」の形声で、志し向う所、状態のこと。向は「宀(家)」と「口(窓)」との象形で、北向きの窓のこと。まどは南北相對することから向合うの意に用う。また、むかうの意で、先に目当があつて其方へ真正面にむき進むこと。《趣向》はおもむき向うこと。更は明らかなる方面に改めかえしむる意。平は氣の舒びやかな意の「亏」と、その氣の分散して滞なき意から、転じて広くないらか、無事、安樂等の意。《平常》はつね、ひごろ。日常の意。『臨濟録』には有名な「無事是れ貴人、但造作すること莫れ。祇だ是平常なり。」とある。『正法眼蔵』「神通」に「不染汚とい

『普勸坐禅儀』ノート(その三) (神戸)

うは平常心なり。」とある。『聞解』には「趣向更是平常」を「染汚ナキユヘニ、日日サシムク所モ平坦ニシテ、
 嶮難ラシキコトナク、タダ尋常ニシテ、異変奇怪ハ見ヘヌ
 ナリ」と述べ、その典拠を南泉と趙州との商量に置いて
 「趙州南泉に問う、如何なるか是れ道。泉曰く、平常心是
 道。州曰く、還って趣向すべきや否や。泉曰く、向わんと
 擬すれば即ち乖く。州曰く、擬せずんば、如何が是れ道な
 るを知らん。泉曰く、道は知不知に属せず、知は是れ妄
 覚、不知は是れ無記と。」としている。『永平広録』卷
 四、卷八に「平常心是道」の提唱がある。前の「修証自不
 染汚」と、この「趣向更是平常」とは、いわゆる「非思
 量」としての「功夫」「辨道」の仕方を示したものであ
 る。

(ノート)

この段から、一般に「流通分」といわれている。そして、この段は、主に坐禅の機根に対して、差別のないことを説いているのである。ただ、分け隔てなく、差別のない坐禅であるためには、専一なる「功夫」「辨道」が、そのカキメとなっていることである。それを図示すれば第十図のようになるであろう。この図において知られるように、坐



第十図 (不染汚の作法)

禪が「專一」なる「功夫」「辨道」の方向にあれば、その坐禪は「不_レ論_二上智下愚_一、莫_レ簡_二利人鈍者_一。」と誰にでも承当している坐禪である。また坐禪が「專一」なる「功夫」「辨道」の方向にあれば、その坐禪は「修証自不染汚、趣向更是平常。」といった、坐禪のあり方としての境界を現成せしめているのである。

このように、「專一」なる「功夫」「辨道」による坐禪の威儀作法が、「不_レ論_二上智下愚_一、莫_レ簡_二利人鈍者_一」という方面に働けば、それは執われない機根の働きを示すもので、不染汚の修証としての作法であるといえよう。そして、それは「戒・定・慧」のうちで、「慧」的な面を示すものである。これに対して「修証自不染汚、趣向更是平常。」という側は、日常生活の構えの状態を示すもので、「戒」的な威儀としての方面を示しているといえよう。

何処でも坐禪

第十一段（本文）

（訓読）

凡夫、
凡そ夫れ、

自界他方、西天東地、
自界他方、西天東地、等し

『普勸坐禪儀』ノート（その三）（神戸）

等持_二仏印_一、一擅_二宗風_一。く仏印を持し、一ら宗風を擅
唯務_二打坐_一、被_レ礙_二兀_一にす。
地。

雖_レ謂_二万別千差_一、祇管

唯だ打坐を務めて、兀地に礙えらる。

參禪辨道。

万別千差と謂うと雖も、祇管

何_レ抛_二却自家之坐牀_一、
に參禪辨道すべし。

謾去_二來他国之塵境_一。何ぞ自家の坐牀を抛却して、

若_レ錯_二一步_一、当面蹉過。

謾りに他国の塵境を去來せ

ん。

若し一步を錯らば、当面に蹉過す。

（字解）

△凡夫。凡はことごとく、およそすべての意。大凡は大概
・大抵の意で、おゝむねのこと。『聞解』には「凡夫ノ二字ハ大概ノ意ナリ。」というが、「夫」は「凡」を強める助字の意とすれば、《凡夫》は、おおよそすべての意。

△自界他方。界は「田」と「介」の合字で、田と田のさかい目の意。《他方》は十方諸仏の世界。《自界他方》は『聞解』に「自界トハ釈尊一化ノ國土ヲ云フ、他方トハ十方佛土ヲサス。」とある。また、『永平広録註解全書』に「光

湯」に「自界他方ハ無究尽ノ徧界ナリ。」とある。

△西天東地。西は鳥が自分の巢に帰り、その上に止まって居る象形から、鳥のすむ意。転じて、鳥が巢に帰るのは日の没する時であり、日の没する方を「西」の意とする。

故に、鳥のすむ意には「木」扁を加えて「栖」とした。東は、「木」と「日」の合字で、朝日が木の中程まで上った時が「東」。木の上に出れば「杲あきら」、木の下に隠れば

「杳くろ」、となる。△西天東地は『聞解』に「西天トハ、天竺ハ支那ノ西ニ当ルユヘニ、支那ノ人ハ西天ト称ス、西ヨリ来ルト云意ニテ、西来トモ云フ、東地トハ支那、三韓、日本等ヲ総テ称ス、」とある。『正法眼蔵』「辨道話」に「西天東地の古今に、仏印を正伝せし諸祖、いづれもいまだしかのごときの行(真言止観の行)をかね修すときかず」とあり、「坐禅箴」に「おほよそ西天東地に仏法つたはるといふは、かならず坐仏のつたはるとなり。」とある。仏教は東北方に(『大槃若経』第三百二卷)ということから、仏教東漸という説が行なわれた。

△等持仏印。等は均が高低もなく軽量もなく優劣もなく一統に平なるに對し、一様に整い同格なる意。持は握りもつこと、またはさゝえもつこと。『正法眼蔵』には「護持」

「受持」「行持」等の語がある。△仏印は仏心印のこと。仏祖の大悟徹底した心そのものの意で、仏祖のさとりを印形に開示すること。『正法眼蔵』「辨道話」に「人一時なりとも三業に仏印を標し、」とある、身業・口業・意業に仏の心印を現わすこと。『聞解』に「佛印トハ印可ナリ、今時偽リナキト云証拠ニ、貴賤共ニ印ヲ押テ用ルガ如ク、」とある。

△一擅宗風。一は数の始、万物の始、ひとつ・いつの意から。転じて、第一、はじめ、ひとたび、もっぱら、すべて等の意。ここでは、他の入る余地もなく一にの意。擅は「才」と音符の「亶」の形声で、事を專一に力むること、專一にして傍にかまわぬ意。風は「虫」と音符の「凡」の形声で、氣候の異なるに従い風の異にする、いわゆる異なる風に従いその折々に虫類孵化する故に虫をかきその意を示す。また、風は国風なり、諷して之を動し、教えて之を化す意という。ここでは風儀のこと。△宗風は宗旨の風儀。△一擅宗風は『永平広録註解全書』の「光湯」には「佛祖ノ正法眼蔵ハ余門余家ニ等匹セズ、唯面与面、面授ナレバ、果子盆上ノ離面稟モ、佛陀菩提ノ合皿イマニナマガサキナリ。」とある。

△唯務打坐。務はその事を常々の所作として専力すること、事務・職務等。勤はせいを出し骨を折りてつとむこと、勤学・勤行等。勉は力の及ばない所を強いてつとむこと、勉行・勉強等。打は「マ」と音符の「丁^{テイ}」で、うつたたくこと。ここでは、坐を強めるための助字。△唯務打坐は『聞解』に「唯務ノ二字ハ打坐バカリニテ、」とあるように、唯務の打坐として強調したもの。

△被礙兀地。被は覆いこおむること、他より然かせらるる語、る・らる等の意。△被礙はさまざまげる障礙のことであるが、ここでは成り切るの意。『聞解』には「被礙ノ二字ハ、常ナレバ礙ハ障礙トテ、サワリサマタゲラルノコロナレドモ、祖意ノ被礙ニ兀地トアルハ、ソレトハ別意ニテ、被礙ニ兀地ハ、兀地ニカカリテヒマガナイ、他ノ事ガナラヌト云ココロナリ、」として、『学道用心集』の「道に礙へられて当処に明了に、悟に礙へられて当人円成す。」等の語例をあげ、祖述の中に多しとしている。△兀地は兀兀地のこと、不動の状態を形容したもの。ここでは正身端坐のこと。

△雖謂万別千差。別は「月（丹）」と「刀」の合意で、刀をもって骨と肉とを別別に分つ意。辨別・区別といったよ

『普勸坐禅儀』ノート（その三）（神戸）

りに此は此、彼は彼と区別して混雑せぬこと。転じて、離別・送別に用う。△万別千差は八万四千の法門、三千の威儀というように、如来の対機説法には種々な差別のあること。『永平広録』巻第六に「必然として掃破す大虚空、万別千差尽く豁通す。師子児に教ゆ師子の訣、一斎都て畫図の中に在り。」とある。

△祇管参禅辨道。△祇管参禅辨道はひたすら坐禅すること。只管打坐すること。『正法眼蔵』「優曇華」に「弄精魂とは祇管打坐脱落身心なり、」とある。坐禅に精魂を弄する意。

△何抛却自家之坐牀。抛はなげうつこと、投棄すること。却是退けて受けざる意、却掃は後ずさりして掃うこと。退は進と対し、後へさがること。△抛却是投げ捨てしまうこと。牀は「木」と音符の「牀^{シメツ}」の形声で、人の安坐する台。また寝台の意。△坐牀は坐禅している牀で、ここでは、坐禅しているそのこと、脚下のこと。

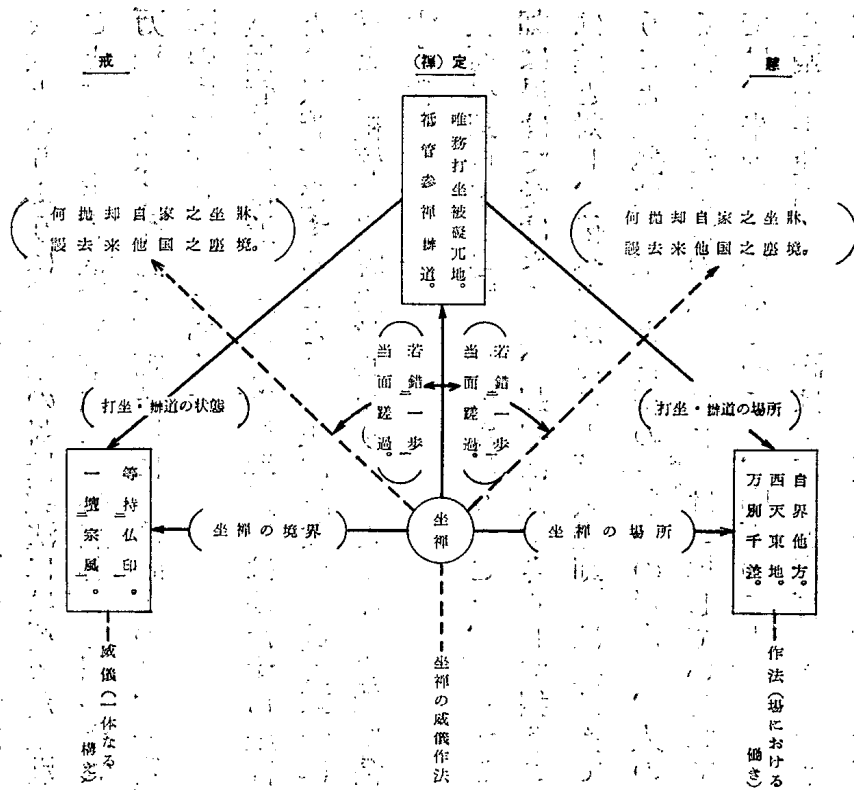
△謾去来他国之塵境。謾は「言」と音符「曼」の形声で、欺く、あなどる、おこたるの意。去は「大」と音符「ム^{キヨ}」の形声で、人の相離れ、その場を行く・のく意。来は、上部を穂、中部を莖、下部を根にした、こむぎの象形。この

むぎは天より降り授かった故に転じて、きたる・いたる等の意、後世むぎの意には「麦」を用う。《去来》は行つたり来たりすること。《塵境》は色声香味触法の六塵六境のこと。《去来他国之塵境》は『法華経』「信解品」の長者窮子のたとえを引用したもの。『正法眼蔵』「行持」には「行持におもむかんとするは、なほこれ行持をこころざすにたれども、真父の家郷に宝財をなげすて、さらに佗国^レ跼^{ヘイ}の窮子となる。跼跼のときの風水、たとひ身命を喪失せしめずといふとも、真父の宝財なげすつべきにあらず、真父の法財なほ失誤するなり。」とある。

△若錯一步。錯は「金」と音符「昔」で、金を塗りメッキすることから、かざる・たがう・あやまる等の意。誤は誤字というように仕損じることに対して、錯は彼方此方行き違いの意。《錯一步》は一步の足の向け方をあやまること。

△當面蹉過。當は「田」と音符「尚」の形声で、古は井田法で田と田は区畫正しく相對していたことから、転じて事理宣しきにならうこと、また、向こうと手前とばったりとあたりつくこと、真直にあたること。蹉は「足」と音符「差」の形声で、つまづく・失敗すること。過は「過」と

第十一圖（一体なる作法）



音符「𠂔」の形声で、渡り超えること。また、あやまち・とがの意から、気が付かずに誤って悪しきことをなすこと、過失の意となる。《當面蹉過》は面前しながら氣付かずに誤まること。

(ノート)

この段は、前段が対機ということをと、とりあげていたのに対して、坐禅の場所を主としてとりあげている。坐禅はどんな世界でも処でも普遍的でなければならぬことを述べている。ただ、この段でも、そうあるためには前段と同じように、「唯務打坐」「祇管參禪」としての坐禅であることにおいてである。そこで、それを図示すれば、**第十一** 図のようになるであろう。即ち、坐禅は「自界他方、西天東地。」と如何なる場所でも、「雖謂万別千差」と如何なる法門にも当てはまっているのであるが、坐禅の進む方向は唯一つ、「唯務打坐、被礙兀地」「祇管參禪辨道」のみである。もし、「自界他方、西天東地」「万別千差」と何にでも当てはまるからといって、「唯務打坐、被礙兀地」「祇管參禪辨道」の方向でなく、「錯一步、当面蹉過」と、少しでも外れたならば「何拋却自家之坐牀、謾去來他国之塵境。」ということになるのである。換言すれば、坐禅が

【普勸坐禅儀】ノート(その三) (神戸)

「唯務打坐被礙兀地」「祇管參禪辨道」の方向にあれば、坐禅の境界は「等持仏印、一擅宗風」といった状態にあるのである。そして、また、坐禅は「自界他方、西天東地」「万別千差」と、如何なる場所、法門にも、そのものとして体なる作法を展開せしめるものであるといえる。

直下の坐禅

第十二段(本文)

既得_二人身之機要_一、莫_三虚_二 既に人身の機要を得たり、虚度_三光陰_一。 しく光陰を度ること莫れ。

保_二任_一仏道之要機_一、誰浪_二 仏道の要機を保任す、誰か浪樂_三石火_一。 りに石火を樂まん。

加之、 加之、しかのみならず

形質如_二草露_一、運命似_二 形質は草露の如く、運命は

電光_一。 電光に似たり。

倏忽便空、須臾即_二 倏忽として便ち空じ、須

失_一。 臾に即ち失す。

(字解)

△既得人身之機要。機は「木」と「幾」の会意形声で、事を発せしもの。古は木にて「しかけ」を作った。また、幾

は幾微の幾で物の現れんとする「きざし」の意。更に最も大切なもの・根本的な事からの意。機用・禅機といえは、はたらき・作用。契機・機縁といえは、きっかけ。機根・根機といえは教法を聞く人の宗教的素質。対機説法の機から機は教えを聞く人、衆生のこと。《機要》は、かんじんかなめのところ。大切な人身としての機根。《人身》は『正法眼蔵』「出家功德」に「すでにうけがたき人身をうけたるのみにあらず、あひがたき仏法にあひたてまつれり。」とあり、「深信因果」に「われらが人身をうけて仏法にあふ、」とある。

△莫虚度光陰。莫は「日」が「艸」(艸の合字で、草の多き意)「の中に没せし形の会意。転じて、なし・くらし等の意。日を加えて暮とかけば、くれる意。ここでは、助動詞として、なかれの意。虚は音符の「声」と眩空なる「丘(聖)」から、から・実なし・物なし・むなしの意。度は渡に通じ、水(川)をわたること。済度といえは、すくいわたすこと。光は「火」と「人」の会意で、人の上に火のあることで照り輝くこと。陰は「阜(阜)」と音符「食」の形声で、山の北、かげの意。《光陰》の光は日、陰は月で、月日・歳月のこと。日光夜陰のこと。

△保任仏道之要機。保は養うこと。転じて、たもつ意。保存・保守・保育というように、かかえ守ること。任は「イ」と音符「壬」の形声で、任務・責任というように、人が己の責務を保ちになり意。《保任》は保護任持すること。『正法眼蔵』「坐禅箴」に「仏光明といふは、一句を受持聴聞し、一法を保任護持し、坐禅を単伝するなり。」とある。その他『正法眼蔵』の随所に使われている。《要機》は大切な作用。仏道における刊要なもの、即ち坐禅のこと。

△誰浪染石火。浪は「水(シ)」と音符「良」の形声で、流れる貌から、波の意。また、精要ならぬ貌から、おろそか・みだら・むだ・むなしの意。石は「厂(厓)」、下に「口(石の形)」の横たわる象形で、石のこと。《石火》は石を打って発する火、転じて極めて速いこと。また、短い時間のこと。無常迅速なること。

△加加。加は「口」と「力」の会意で語の増し加わる意。《加加》は加之と同じで、そのみならず、そればかりかさらにの意。

△形質如草露。形は刷毛にてえがく「彡」と音符「开」の形声で、物のかたちを象ること。質は物を出して銭(貝)

を受けることを本義とするという。更に、もと・もちまえ・実質の意。《形質》は形体実質のこと。ここでは肉体的こと。《草露》は草葉における露で、転じて、はかないこと。無常なこと。

△運命似電光。命は「口」と音符「令^{レイ}」の会意形声で、天子の令を人民に伝へ、その令に従わしめること。秦の始皇、命を改めて制とし、令を改めて詔とした。《運命》は人生のさだめ。ここでは寿命の意。電はいなずま・いなびかり・光の意。《電光》はいなびかりの意で、事の迅速なるに喩える。電光石火・電光朝露のように極めて短い時間。

△倏忽便空。倏（倏）は「犬」と音符「修^{イッ}」の形声で、犬の走ること速かなる意。忽は「心」と音符「勿^{フツ}」の形声で、忘れて事を省みないこと。にわか・突然・ついの意。

《倏忽》はまたたく間にの意。便は「人」と「便」の会意で、人は不便なる処あれば更め直して安きに従うの意。故に、安じ宜しくすること。ここでは、たやすく・すぐにの意。空はうつろ・何もなし・から・無益なこと。仏教では固定的実体のないこと、縁起しているということ。

△須臾即失。臾は「申」と「へ（右に引く）」、または「臼

『普勸坐禅儀』ノート（その三）（神戸）

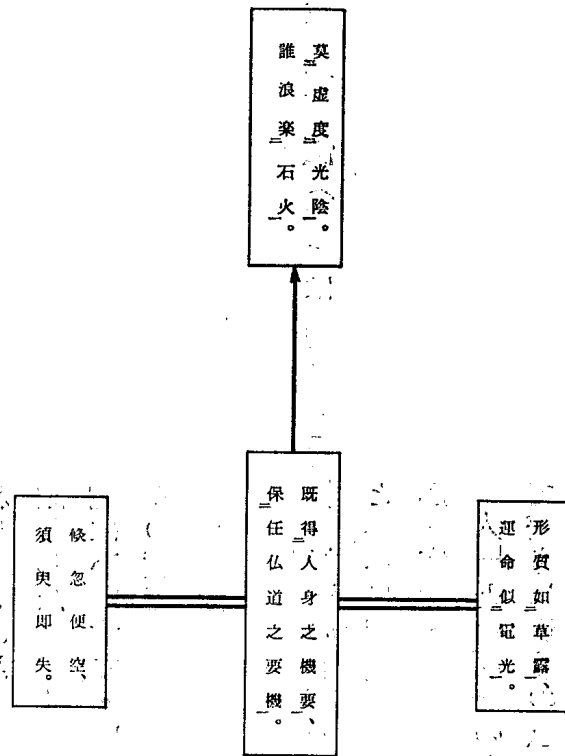
（両手）」と「人」の会意で、しばらくと引き止どめる意。《須臾》は少しの間・またたく間の意。即（即）は「自（飯の香の意）」と音符「卍」の形声で、食事に就くこと。転じて、就く意で、接続詞として上の語と下の語とを接続する。すなわちと訓じ、此より彼へつき従うこと。直ちにそれになること。失は「手」と音符「乙」の形声で、手より物が離れ落ちる意。得失・紛失というように、相対する手より取り失しなうこと。

（ノート）

この段は、誰れもが不染汚の働きの要を得ているのであり、何処においても一体なる働きが身についているということを示している。即ち、われわれは既に、正法の威儀作法を身につけた「坐禅人（兀坐人）」であるが、この坐禅人としての人身は「無常・無我」そのものであって、それを離れたものではない。それ故、虚しく日月を送ってはならないし、また刹那生滅の人身に執われて、ただ虚しく樂しむということなく、本来の「無常・無我」としての坐禅人のあり方において、発心・修行すべきを説いているのである。

これを図示したのが、第十二図である。即ち、「既得二

第十二圖 (直下の発心修行)



人身之機要」 「保任仏道之要機」といった「坐禪人」であるわれわれは、「形質如草露」、運命似電光」といったものであり、「倏忽便空、須臾即失。」といったこと

とを本質としている。それ故、その本来性に即しているには、「坐禪人」であるわれわれは常に、「莫虚度光陰」「誰浪染石火」といった方向に発心修行されてなければならぬのである。

坐禪生活の用心

第十三段 (本文)

(訓読)

冀其参学高流、久習摸象、勿怪真竜。冀はくは其れ参学の高流、久しく摸象に習つて、真竜

精進直指端的之道、尊貴絶学無為之人、を怪しむことなかれ。直指端的の道に精進し、

合沓仏仏之菩提、嫡嗣祖祖之三昧。久為恁麼、須臾即失。絶学無為の人を尊貴し、

是恁麼。宝蔵自開、受用如意。祖の三昧を嫡嗣せよ。久しく恁麼なることを為さば、須らく是れ恁麼なるべし。

宝蔵自ら開けて、受用如意ならん。

(字解)

△冀其参学高流。冀は「北」と音符「異」の形声で、昔支那を九州に分けた時の北方にある州の名、今の直隸山西の両省及び河南省と満洲の一部という。「希^キ」に仮借して、ねがう意。「希」は希望としてのねがう、「冀^キ」は欲求としてねがう、「願」は願望としてねがうこと。また「將」を、こひねがわくはと訓む時は請願してねがうこと。其は直接物を指すに用いる。また、語調を強める助辞。学(學)は古文にて教と書き、「教」と「口(上より覆う貌で愚なところ)」と「臼(両手を拱き貌で謹むこと)」で、教えをうけて無智を開き学び覚ること。《参学》は参禅学道のこと。道元禅師は、学人に対して「参学すべし」としていたるところで参学の仏法を強調している。高はものみ台の高き形で、転じて、たかさ・とうとしの意。流は「水」と「流(突出て行く)」の会意で、水のなかれる意。転じて、過ぎ行く・めぐる・布くの意。ここでは「流輩」の意で、流れを同じくするなかまの意。《高流》は志ざしを高く持する流輩の意。

△久習摸象。久は「人」と「入」の合字で、人を後より引

『普勸坐禅儀』ノート(その三)(神戸)

止める意。転じて、ひさしき意。摸は「才」と音符「莫」の形声で、手にてさぐる意。摸索のこと。象は動物の象のこと。また、かた・かたどる・おもりの意に用いる。《摸象》は群盲摸象のこと。群盲(衆盲)が象の一部を捫摸して象というものを想像することで、長阿含経卷十九、竜馬品に出ている譬喩。高祖真筆の『天福本』には「模象」とある。模は模型のこと。秦慧玉師は『普勸坐禅儀講話』(曹洞宗宗務庁刊)において、「象の字には動物のゾウのほかに、カタという義がある。そうすると模象は模形とか模型と同じ意になる。」として、「摸象」は「模型」の意味の「模象」方が、模と次の句の真とが対をなし、スッキリしているといっている。

△勿怪真竜。勿は「夕(旗竿)」と「夕(旗の旒)」の象形で、州里に建て事変の時、人々をあつめるに用いた信号旗のこと。その旗の色により緩急を示したことより「にはか」の意の転用、更に「弗」に仮借して禁止を示す。怪は「忄」と音符「聖^{ケイ}」の形声で、あやし・異なり・いぶかるの意。真(眞)は「匕(化)」と「目」と「一(隠る)」と「八(乗物の形を示す)」の会意で、仙人が道を成就し

『普勸坐禅儀』ノート(その三) (神戸)

化して昇天し、遂に人目から隠る意であつて、道家の思想という。転じて、自然・妙理・神氣・正直・正実等の意。

《真竜》の故事については『聞解』に「申子略」に云くとして、昔葉公子高ヘッコウシノコウという人が竜を好んで、居室に竜をホラ雕したりして楽しんでた。これをほんとうの竜が聞いて天から降りて、窓から入ってきた。すると葉公はこれを見て驚いて逃げ出し、ついに氣絶したという莊子、並に劉向新序雜筆五の話である。『正法眼蔵』「谿声山色」に「生をうくるに為ニ法求ムル法のこころさしなきによりて、真法をみるとき真龍をあやしみ、正法にあふとき正法にいとほるなり。」とあり、『永平広録』巻第九に「辨道功夫歇むべしと雖も、老婆汝が為にいう繩々。真龍愛する処真龍現ず、一段の風光紙灯を吹く。」とある。

△精進直指端的之道。精は「米」と音符「青」の形声で、米をしらげ純粹ならしむ意。進は「辵」と音符「閻」の省畫の合字で、登る・すすむ・行く・勉むの意。退に對し段々向へ行くこと。《精進》は一所懸命努力すること。弄精魂のこと。『永平広録』巻第五に「いわゆる、精進というは名利を求めず、声色を愛せざるなり。」とある。《直指》は直接に本源を指示することで、『聞解』をはじめ一

般に『宗門十規論』にみられるところの「直指人心見性成佛」のこととしてゐる。《端的の道》は端直的実な道で、そのものずばりの道。即ち正身端坐のこと。

△尊貴絶学無為之人。尊はもと「尊」とかき、「酋(酒樽)」と「卩(両手を捧ぐる貌)」の会意で、祭祀に供する貴い酒樽のこと。後転用して、尊を高貴の意とし、卑の下賤に對する意としてゐる。酒器の意には「缶トクリ」・「木」扁を加え、罇・樽と書く。貴は「貝」の字義より、財貨の多くある意。後転じて、高価・高位高官の意となる。《尊貴》はたつとぶこと。『聞解』には「精進ハ修ナリ、尊貴ハ証ナリ、コノ両段ナラヌヲ祖訓トス、」とある。即ち、修証一如(本証妙修)を精進尊貴することといえよう。絶は「糸」と「刀」と「卩セツ」の合字で、糸を断ち切ることから、たつ・たゆる意。《絶学》は菩提を究尽したさとの境界。無は大・甘・甘・林の合字で、木が大に繁茂する意であつたが、後世は亡に通じて、存在しない・なしの意。また、有無の對立を絶した妙無。為は猴が爪をふり揚げて引搔かく貌の象形で、成す・作す・行ひ・治む等の意。《無為》は因縁によつて造作されないもの。自然のまま無作意のこと。有為に對すること。《絶学無為之人》は『証道歌』

に「君見ずや、絶学無為の閑道人、妄想を除かず真を求めず、」とある。

△合沓仏仏菩提。合は「△(集まる意)」「口」の会意で、衆口相一致し口を合すこと。転じて、物の相会すること・集まること。沓は湧出る意の「水」と言語を示す「日」との会意で、言語流暢にて淀なき意。転じて、重る・合う等の意。《合沓》は『聞解』に「幾重モ重也、一組ノ重箱ノ重ル様ナル意」としているように、重なり一致すること。

△嫡嗣祖祖之三昧。嫡は「女」と音符「商」の形声で、本義は女のつつしむこと。嫡を正妻の義とするは敵の仮借という。転じて正妻の子で世を嗣ぐ者の意。嗣は「口」と「冊」と音符「司」の形声で、國を嗣ぐ意。転じて、親のあとつぎの意。《嫡嗣》は仏祖の正法を相続する人。『正法眼蔵』「袈裟功德」に「ときにひそかに発願す、いかにしてか、われ不肖なりといふとも、仏法の嫡嗣となり、正法を正伝して、郷土の衆生をあはれむに、仏祖正法の衣法を見聞せしめん。」とある。祖は「示(神)」と「且シヨ(祭りの台)」の会意形声で、先祖・その家の最初のおや・はじめの意。仏教では一宗一派の開祖のこと。また、世代の一

『普勸坐禅儀』ノート(その三) (神戸)

人に数えられている人。《祖祖》は歴代の祖師の意。《三昧》は samādhi の音訳、定・正受・等持・調直などと言訳される。(『仏教語大辞典』中村元著)には「心をひとところに定めて動かさないから定、正しく所観の事がらを受けるから受、平等の心をたもつから等持、諸仏・諸菩薩が有情界に入って平等にそれを守り念ずるから等念、定中に法樂を現ずるから現法樂住、心の暴をととのえ、心の曲がったのを直し、心の散ったのを定めるから調直定、心の動きを正して、法に合一させる依処となるから正心行処、思慮をとどめて心の思いを凝結するから息慮凝心といわれる。」とある。『正法眼蔵』「辨道話」に「この三昧に遊化するに、端坐參禅を正門とせり、」とあり、また「三昧王三昧」には「あきらかにしりぬ、結伽趺坐、これ三昧王三昧なり、これ証入なり、一切の三昧はこの三昧の眷屬なり。」とある。

△久為恁麼、須是恁麼。久は「人」と「入」の合字で人の後より引止める意。転じて、待つ・ひさしき意。《久為恁麼》、須是恁麼は『聞解』に「前文」の最後にある「恁麼の事を得んと欲せば急に恁麼の事を務めよ」の意を

以って、再び結し示されたものとしている。『正法眼蔵』
「恁麼」には雲居道膺(八三五?—一九〇二)の「恁麼の
事を得んと欲せば、須く是れ恁麼人なるべし。既に是れ恁
麼人なり、何ぞ恁麼の事を愁えん。」の示衆を掲げて拈提
されている。

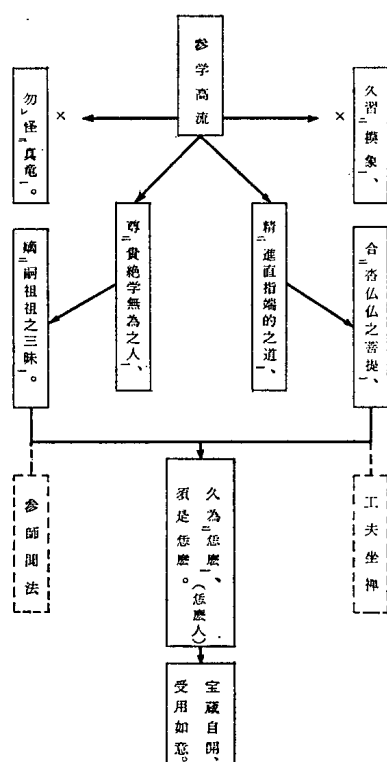
△宝蔵自開、受用如意。寶は「宀」と「玉」と「貝」と音
符「缶」の会意形声で、一(いえ)の中に玉や貝(財)の
ある意で、たからのこと。蔵は「艸」と「臧」の合字で、
匿しおさめる意。転じて、蔵匿する処・くらの意。△宝
蔵は宝物を入れるくら。仏の教えのくら・法蔵の意。こ
こでは『聞解』に「人人屋裏ノ般若蔵ナリ、」とあるよう
に、人人の心源をいう。開は「門」と音符「开」の形声
で、門を張りひらくこと。あく・あけること。受は物を相
付与する「受(爪と又)」と音符で舟の省略「口」の形声
で、上より渡せば下にて承くる意。承は上よりうけるは奉
承の意であるのに対し、「受」は我が方にうけ取りうけ入
れる受納の意。△受用はうけ用いること。『正法眼蔵』
「辨道話」に「いはんやこの単伝の正法には、入法出身、
おなじく自家の財珍を受用するなり。」とある。また、受

用については「自受用」「他受用」とがある。自受用につ
いては「辨道話」に「自受用の境界なるをもて、一塵をう
ごかさず、一相をやぶらず、広大の佛事、甚深微妙の仏化
をなす。」とあり、「佗心通」に「佗人われをみるべから
ずといはば、自受用さらに自受用を証すべかず、修証ある
べからず。」とあるように唯仏与仏の境界である。他受用
は外に働き出て、唯仏与仏の境界を衆生に受け用いさせよ
うとする化導の立場。△如意は意の如くおもいのままに
なること。

(ノート)

最後のこの段は、誰でも何処においても、本来坐禅人と
してあるのだから、参禅学道を志ざす者は思慮分別による
仕方や、生命のない概念的な仕方によってでなく、それに
直指するところの坐禅に精進することであり、正師を尊貴
していくことである。即ち、『学道用心集』でいうところ
の「功夫坐禅」と「参師聞法」である。そうすることによ
って「坐禅人」は本来の坐禅人、即ち「恁麼人」としての
働きをなしているのであるとするのである。

第十三図 (坐禅人の用心)



これを、文にそって図示すれば第十三図のようになるであらう。即ち、「参学高流」である参禅学道者の用心とし

『普勧坐禅儀』ノート(その三) (神戸)

ては、「久習摸象、勿怪真竜。」といったことのないように、常に「精進直指端的之道」と共に「尊貴絶学無為之人」ということではなければならない。そして、「合沓仏之菩提」と共に「嫡嗣祖祖之三昧」ということにならなければならないのである。即ち「参学高流」は、常に「工夫坐禅」し、「参師聞法」ということが必要な用心である。そうすることによって、本来の坐禅人、即ち「恚麼」なる人となるという。恚麼人ならば、威儀作法すべてが、この恚麼自ら開示したものとなって、自由自在にさまたげられることなく受用されるのである。

〔昭和五十一年度文部省科学研究費(総合研究・A)による研究成果の一部〕